

血液製剤の廃棄から見た輸血管理室の課題

森本 武次 ,前川 芳明 ,山本 慶和 ,松尾 収二 (天理よろづ相談所病院)

輸血業務の一元管理 (以下一元化)は、血液製剤の廃棄減少に大きく貢献したが、さらなる減少を目指すために、廃棄の現状から輸血管理室が取り組むべき課題を明確にする。

【対象および方法】一元化前の2年間 (1998年4月から2000年3月)と後の3年間 (2001年4月から2004年3月)に提出された血液製剤廃棄理由書から、一元化前後の廃棄状況を比較した。

【結果および考察】対象期間における製剤の廃棄量は、一元化前2年間は147, 100バッグ/年、一元化後3年間は56, 62, 31バッグ/年と著明に減少していた。その主な原因はMAPの期限切れによる廃棄が一元化前の100, 74年から一元後は37, 37, 8バッグ/年と減少したことであった。一方、一元化前後に関係無く、期限切れ以外の廃棄量は98年の47バッグを除き、残りの4年間は19~26バッグ/年であった。

そこで、期限切れ以外の原因による廃棄を製剤の取り扱いに起因するもの(群)、患者に起因するもの(

群)に分類した。その結果、群ではFFPの落下や製剤へのフィルター接続時の破損などが多くみられた。

群では、FFP溶解後に容態急変で使用されなかった例や手術時使用予定で購入したPCあるいは溶解したFFPが使用されずに廃棄にいたった例が多くみられた。

群については、現在、研修医を対象に実施している輸血に関する勉強会の対象を広げ、製剤の取り扱い上、注意すべき点について実例を踏まえて啓発したい。群については臨床上やむを得ない例もあると思われた。今後、手術術式による適正なPC準備量について検討するための情報収集を行い、それを元に廃棄血液の減少に取り組んでいきたい。

【まとめ】輸血業務の一元化はMAPの期限切れによる廃棄の減少に効果があった。しかし、製剤の取り扱いによる廃棄や手術時使用予定で準備したPCの廃棄については効果がなく、今後、取り組むべき課題として残された。

0743-63-5611(8615)